

タイトル	英領西アフリカにおける図書館の発展：植民地期から独立後まで
著者	福田，都代
引用	季刊北海学園大学経済論集，53(4)：117-145
発行日	2006-03-20

《論説》

英領西アフリカにおける図書館の発展： 植民地期から独立後まで

福田 都 代

序 文

1879年以前、サハラ以南のアフリカ（Sub-Saharan Africa）の90%はアフリカ人によって統治されていたが、1880年代から1890年代にかけて、ヨーロッパの国々に支配され、植民地化される地域が相次いだ。特に西アフリカの大部分はイギリスとフランスが事実上、分け合う形で植民地化されるに至った。イギリスはナイジェリア、ガーナ（旧黄金海岸）、シエラレオネ、ガンビアを支配下におき、フランスはセネガル、ギニア、ベナン（旧ダホメ）、ニジェール、トーゴ、ブルキナファソ（旧オートボルタ）、コート・ジボワール、マリを支配した。当時、西アフリカにおける独立国はアメリカから帰還した元奴隷達によって1847年に建国されたりベリアだけであった。イギリスは西アフリカにおける植民地統治の拠点として、最高司令部を1897年から1956年までガーナのAccraにおいていた。

イギリスは1850年の公共図書館法の制定によって、国内すべての自治体に公共図書館が設置されている図書館先進国であり、植民地化したアフリカ地域にもイギリス人達のための図書館を設立した。イギリスは図書館が果たす教育的役割を他の宗主国よりも現実的にとらえており、イギリス本国からだけでなく、英連邦諸国からの図書館員達をもアフリカ植民地へ派遣した。西アフリカ地域は「白人の墓場」と称され、アフリカ南部地域に比べて、熱帯病が蔓延する危険性が高く、生活環境が過酷であったことから、駐在していたイギリス人やその他のヨーロッパ人のための読書やリクリエーションの場として図書館が必要とされていた。また、人種差別の激しかったアフリカ南部に比べて、西アフリカでは教育を受け、会費を納入できる経済力のあるエリート層のアフリカ人に対しては会員制図書館の利用を制限していなかった。後述するが、富裕層の西アフリカ人の中には私設図書館を作り上げた人物もいたのである。さらにイギリスは第二次世界大戦終結直前、英語とイギリス文化普及組織であるブリティッシュカウンシル（British Council）を通じて、英領西アフリカにおける公共図書館や大学図書館の設立に深く関わってきた。また英領西アフリカの図書館はアメリカのいくつかの財団からの資金や人的援助も受けてきた。ケニアやタンザニアなど東アフリカ諸国は、図書館の設立、運営方式および図書館員養成に関して、ナイジェリアやガーナで導入された西アフリカモデルに近い方式を後に踏襲した。現在、ナイジェリアとガーナの2カ国は、アフリカの図書館界において指導的役割を果たす人材を輩出している。他方、ナイジェリアやガーナに比べると、シエラレオネとガンビアは図書館の発展に関して政府からの積極的な支援がなかなか得られず、独立後、図書館の人材養成に関してガーナや

ナイジェリアに遅れをとり、図書館財源の獲得にも成功しなかった。そのため、本稿では主にガーナとナイジェリアを中心に、植民地時代から1970年頃までの図書館の成立過程を追い、それに関わった様々な図書館関係者や欧米の図書館支援団体が果たした役割と功績について紹介する。

第1章 植民地時代の西アフリカの図書館

1. 図書館の先駆的存在としての学術専門図書館の成立

シェラレオネには1827年にアフリカ人の牧師を養成する目的で、Fourah Bay Collegeがイギリス教会伝道協会（Church Missionary Society）によって現在の首都であるFreetownに設立され、その附属図書館は西アフリカ最初の学術図書館とされるが、正確な設立年は不明である。1879年にFourah Bay Collegeの図書館についての記述が存在するため、おそらく図書館はその前に設置されたものと推測される。Fourah Bay Collegeは英領西アフリカにおける最初の高等教育機関であり、1876年にはイギリス北部のダーラム大学と提携し、英領西アフリカにおける教育の中心となった。後にイギリスからの独立後に創設されたシェラレオネ大学（University of Sierra Leone）に併合された。

20世紀に入って、西アフリカに初めて設置された専門図書館はナイジェリアのLagos州におかれた最高裁判所図書館（High Court Library）である。この図書館の所蔵資料の中には1806年にまで遡るものがあり、19世紀末から資料は収集されていたものの、図書館として開館したのは1900年である。ガーナにおいても1930年代に最高裁判所が慣習法関係の資料を収集し、法律関係のコレクションを構築していた。

次いで医学関係の専門図書館が出現する。これらは植民地政府が管轄する研究所に設立されたものが多かった。まず熱帯医学関連の図書館として、1908年当時、ガーナに病理学者達が熱帯病の医療研究施設（Medical Research Institute）に図書館を設置し、着々と資料を収集していった。ガーナのAccraとナイジェリアのYabaにあった医学研究施設（1910年設立）では1920年頃から医学雑誌を購読するようになった。加えて西アフリカにおける現地人医師の養成が急務となり、Yabaには1930年に医学校が作られ、図書館も併設された。1920年にはAccraに保健研究所図書館（Health Laboratory Services Library）が設置され、その後、ナイジェリアのLagosにある医療機関に第2の医学図書館が設置された。アメリカのロックフェラー財団国際保健部黄熱病委員会は、Lagosの医学図書館に対し、1929年から1933年にかけて、報告書、パンフレット、抜刷などの資料を寄贈した。その後、YabaとLagosにおかれていた医学図書館が統合され、中央医学図書館（Central Medical Library）となった。医学関係ではこれらの図書館のほか、1924年にナイジェリアのVomに国立獣医学研究所図書館（National Veterinary Research Institute Library）と1935年にガーナ薬学協会図書館（Pharmaceutical Society of Ghana Library）が設立された。

西アフリカには熱帯地域における農業や地質調査に対する宗主国の関心に呼応して、その関係の図書館も設立されていた。その最初のものはイギリス綿栽培者協会研究局（British Cotton Growers Association Research Station）が1905年に設立した研究図書館と、1910年に設立された国立穀物研究所（National Cereals Research Institute）の図書館である。二つの世界大戦の間にナイジェリア北部のKadunaに地理調査機関図書館（Geological Survey Library：1919

年設立), ガーナには黄金海岸農業省図書館 (Gold Coast Agriculture Department Library : 1926 年設立) と気象サービス図書館 (Meteorological Services Library : 1937 年設立) といった研究機関や官庁に所属する図書館の設立が相次いだ。1938 年にはガーナにカカオ研究所 (Cocoa Research Institute) が開設され, その附属図書館は 1944 年に設置され, 世界有数のカカオに関する研究資料を有するに至った。ナイジェリアには西アフリカヤシ油研究所 (West African Institute for Oil-Palm Research) が 1939 年に設置され, この分野における専門資料を収集していた。仏領西アフリカでも農業分野の専門資料を収集していた図書館があったが, 当時, 英領西アフリカ諸国と仏領西アフリカ諸国に存在した研究図書館を結ぶネットワーク組織は構築されておらず, 情報交換も行われなかったため, 専門資料の所在や研究成果は, 他のアフリカ植民地へ伝播されなかった。また第二次世界大戦が終結するまで, アフリカの歴史資料やオーラル・ヒストリー (口述記録) などを含む記録文書に対する保護や組織化もほとんど行われていなかった。唯一の例外は 1917 年から 1923 年までガーナに駐在し, 先住民問題の担当官だった J. T. Furley がイギリス本国やヨーロッパの文書館から自費で資料の複製や図書資料を集めて構築したコレクションである。しかし, 当時の学者達はアフリカに関するデータや資料を集め, それらをヨーロッパで出版することを一種の「学術植民地主義」として受けとめていた。このような考え方がアフリカにおける学術的な図書館の発展を遅らせた要因の一つとなったと Maack は述べている。¹⁾

2. キリスト教伝道団による学校教育の普及と図書館活動

西アフリカ諸国における公共図書館の起源は, 様々なキリスト教伝道団の布教活動と深く関わっている。各教団は植民地における教育普及の主導権をにぎり, 地域の図書館の発展においても少なからず影響をもたらした。英領西アフリカにおけるキリスト教伝道は, まずカトリック教団によって開始され, 次いでイギリス国教会系の教会伝道協会が解放奴隷の入植地だったシェラレオネに伝道団を派遣して熱心な布教活動を始めた。プロテスタント教伝道団は 1820 年代にガーナで活動し始め, 1840 年代には他に 4 つのキリスト教伝道団が進出して, 出版活動を始めていた。これらの伝道団はアフリカ人の識字教育を促進するため, ミッションスクールも設立し, ガーナでは 1881 年までにその数が 137 校に達した。²⁾ またガーナには J. P. Brown 神父が Cape Coast Book Club を発足させたが, 公共図書館の設立までには至らなかった。

1890 年にイギリスの植民地において教育長官が任命され, 植民地省から教育に必要な予算が支出されるようになったが, その大部分はキリスト教伝道団が設立したミッションスクールに対する補助金として費やされた。当時, 教育用の資料が不足していたため, 伝道団は図書の提供と出版および図書館の普及に関心をもつようになった。中でもメソジスト派の伝道団は西アフリカ文学協会を結成し, 地域をテーマにした著作やアフリカ人によって書かれた著作を出版した。その他のいくつかの伝道団は巡回文庫をもち, 1929 年には植民地におけるキリスト教文学に関する国際委員会 (ICCLA : International Committee on Christian Literature in the Colonies) から図書の寄贈を受けている。ICCLA は西アフリカの図書館づくりを支援するため, ニューヨークのカーネギー財団へ資金援助を依頼した。そして伝道目的のために設置する図書館にとって必要な基本図書のリストを作成し, 1939 年にはニューヨークのカーネギー財団から西アフリカ地域の図書館の状況を調査するよう要請された。³⁾ ICCLA の Margaret Wrong は植民地政府の教育担当官だった Hanns Vischer と共にその調査を手がけ, 「図書館：ナイジェリア, 黄金海岸,

「シェラレオネ、ガンビア」と題した報告書 (Vischer/Wrong Report) をまとめ、カーネギー財団に提出した。

宗教関係者の中で個人として公共図書館の開設に尽力した人物は、慈善家で聖職者の John Aglionby である。彼は Accra の主教で教会を設立しただけでなく、多数の学校の設立も実現した。1928年に Accra に貸出図書館を作る計画を公表し、図書に寄贈を募り、図書館を開館した。6千冊にのぼる蔵書は主に彼の学校 (Bishop's Boys School) に収蔵されていたが、Aglionby はこの状況に満足せず、1933年に植民地政府に対し、図書館の建物を建設するよう要請した。しかし植民地政府がこの要請にすぐ対応しなかったため、彼は自宅に小規模な貸出図書館を設置した。そしてこの図書館運営の経験から図書館に対する認識をさらに深め、1935年に植民地政府総督へ書簡を送り、公共図書館建設のために千ポンドの支出を要請し、さらに募金活動に着手することを示唆した。植民地政府はやっとこの要請に同意し、当時建設中だったジョージ5世記念ホールの中に図書館棟を設置することを決定した。しかし、この建物の完成直後に起こった大地震によって、図書館棟として使う予定だった場所は地震の被害を受けた植民地政府のオフィスに転用されてしまう。結局、ガーナにおける公共図書館の設立は第二次世界大戦が終わるまで実現されることはなかった。しかし、当時のガーナには訓練を受けた図書館員がいなかったため、後に黄金海岸図書館評議会 (Gold Coast Library Board) の責任者となった Evelyn J. A. Evans は「この天災は幸運だったかもしれない。訓練を受けた図書館員なしで図書館サービスを運営しようとするのは大きな誤りである」と後に述べている。⁴⁾

ナイジェリアもガーナと同様にキリスト教伝道団の管理下による学校教育システムが普及していた。ただし、ナイジェリアの場合、北部はイスラム教地区でキリスト教団の活動は事実上、排除されていたため、学校教育を受けられる生徒の数は南部に比べてきわめて少なかった。さらにナイジェリアではキリスト教伝道団やミッションスクールが所有する蔵書はそれほど多くなく、教育省が出資した図書館もわずかしかなかく、それらの図書館の多くはヨーロッパ人の利用者が中心であった。

3. アフリカ人による私設図書館の設置

ナイジェリアにおける公共図書館の始まりは、1928年に Lagos に駐在していたイギリス人の役人達によって設置された Lagos Book Club に遡る。Lagos Book Club はヨーロッパ人を中心とする利用者達が数少ない図書を互いに貸し借りする文庫のような役割を果たしていた。一方、富裕層のナイジェリア人が図書を収集し、友人達に利用させていた私設図書館もわずかながら存在した。その1人が商人の Tom Jones である。彼は図書だけでなく、政府刊行物も収集しており、政府に対して自分の蔵書を参考図書館のために使用するよう申し出た。彼が収集した1300冊はイギリスの教会伝道協会の C. W. Wakeman の協力を得て選書されたものであった。この蔵書と8千ポンドを遺贈して、1931年5月23日に Lagos に Tom Jones Library が開設された。さらに図書館だけでなく、Tom Jones Community Center も設置した。彼の図書館とコミュニティセンターの利用者は会費を支払うことが前提で、この会員制図書館はもっぱらイギリスからの来住者が利用していた。しかし、調査目的の場合にのみ無料で開放された。司書として Rita Akaje Macaulay を雇い、目録の作成にあたらせた。会費のみでの運営は経済的に困難だったと推測され、Macaulay は1932年にニューヨークのカーネギー財団に接触して資金援助の可能性を探っていたようである。結局、1934年以降は資料の購入費も支出されないまま閉館した。⁵⁾

1920年にLagosに着任したアフリカ弁務官のHenry Carrは当時のナイジェリア人の中では最もきわだった図書の収集家であり、蔵書の埃をはらうためだけに少年を2名雇っていた。CarrはシェラレオネのFourah Bay Collegeの学生だった1870年代から図書を収集していた。彼は教育家、法律家、聖職者と様々な肩書をもつ西欧化されたエリートであり、植民地政府では最も高い地位に昇進したナイジェリア人であった。彼はイスラム教、一夫多妻制度、無教育な人々を軽蔑し、さらに親英派であったため、後世のアフリカ人歴史家からの評価は低い。しかし、彼が他界した1945年には1万8千冊にのぼる蔵書が残された。その内容は、英文学、英国史、社会科学、人類学、伝記、教育学、心理学など多岐にわたっていた。これは当時、西アフリカにおける個人文庫としては最大のものであり、彼の存命中は友人達に利用させていた。彼は将来、ナイジェリアに国立図書館が設立される時には自分の蔵書がその基礎となるだろうと周囲に話していたようである。⁶⁾にもかかわらず、亡くなった時に蔵書を遺贈するという遺言を残していなかったため、彼の蔵書は1946年に政府が購入することになった。しかし、彼の蔵書の目録は作成されておらず、分類されてもいなかったため、1947年にブリティッシュカウンシルはCarrが残した蔵書の目録をDoris Forsytheに作成するよう命じた。

Herbert Macaulayはアフリカ人最初の牧師となった祖父をもち、彼の父親はナイジェリアで最初の中学校を創設し、反植民地活動をしていたというナイジェリアではエリート層の家系の出身である。Macaulayは1920年に英領アフリカ国民会議の設立メンバーとなり、1922年にはラゴスでナイジェリア最初の政党といわれるナイジェリア国民民主党(NNDP)を結成した政治的指導者でもあった。また1944年にはナイジェリア国民会議の委員長に就任し、ナイジェリアの独立に果たした役割は大きい。MacaulayはHenry Carrとは異なり、本格的な図書の収集家ではなかったが、政治活動のかたわらナイジェリアに関する文書、パンフレット、新聞など、独立を模索した植民地時代のナイジェリアについて検証できる資料を収集していた。これらの資料は後年、独立前後のナイジェリアの歴史を研究する上で貴重なコレクションとなった。

4. Lagos Libraryの設立とカーネギー財団の支援

ニューヨークのカーネギー財団(Carnegie Corporation of New York)はアメリカの鉄鋼王であり、鉄道王ともいわれたAndrew Carnegieによって、1911年に1億2500万ドルの基金をもとに設立されたアメリカを代表する財団である。創設者のAndrew Carnegieはスコットランド生まれで、アメリカ、イギリス、カナダの三カ国における公共図書館建設に対して多額の寄付を行い、これらの国々に多数の公共図書館を設立したことで知られている。財団が支援する図書館関連プログラムの対象は主として、図書館学教育の提供、大学図書館への図書寄贈、図書館サービスのデモンストレーション、図書館協会に対するサポートである。Rochesterの調査によれば、1911年から1961年までの50年間にわたって、財団は6800万ドルを図書館関連のプログラムに支出し、そのうち600万ドルは英連邦諸国に対して提供された。⁷⁾

Andrew Carnegieが1919年に亡くなった4年後、Frederick Paul Keppelが財団の理事長に就任し、1941年まで奉職した。Keppelは出版業界、大学、連邦政府における勤務経験をもち、在職中は文化的な慈善活動を重視し、成人教育、図書館、博物館および美術館への支援プログラムを実行した。1912年から1927年にかけて財団の資金はカナダに対して集中的に提供されたが、1926年から英領アフリカ地域にも資金が提供されるようになった。Keppelは1927年に秘書のJames Bertramを伴って、アフリカ東部と南部を視察したが、西アフリカ地域は訪れていない。

この視察旅行によって、Keppelはアフリカにおける図書館づくりへの資金提供に少なからぬ関心を示し、帰国後の1930年代初頭にナイジェリアとケニアの図書館の設立に貢献することとなった。

Alan Burnsは1912年から1924年に植民地政府の行政官としてナイジェリアに赴任し、その後、植民地政府長官としてバハマ諸島に転任し、1929年に再びナイジェリアに戻り、副総督として5年間奉職した。Burnsは読書家であり、アフリカ駐在の経験をもとに後年「ナイジェリアの歴史」という著書を発表した。彼はLagosに公共図書館を設置する必要性を感じ、イギリスにいる兄弟のC. Delisle Burnsに依頼して、カーネギー財団との接触を試みていた。西アフリカにおける人種差別はアフリカ南部や東部と比べて激しくはなかったし、Burns自身も人種差別主義者ではなかったものの、多くの白人駐在者がアフリカ人と肩を並べて閲覧することに対しては抵抗があるだろうと考え、教育を受けたナイジェリア人のための図書館とヨーロッパ人コミュニティのための図書館に分けて2館設立したいという要望をカーネギー財団のFrederick Paul Keppelに書簡で訴えた。KeppelとBurnsは1931年の夏にたまたま滞在していたロンドンで出会い、話し合う機会をもった。この会合の後、Burnsはナイジェリアに戻り、植民地総督のDonald Cameron卿にカーネギー財団からの資金援助の可能性について報告した。Keppelは1932年5月にBurnsあてに電報を送り、ナイジェリアにおける公共図書館発展のために財団が6千ドルを用意できることを確約したが、図書館は白人とアフリカ人両方が利用できる図書館とするように提案してきた。その後、図書館設立のため、BurnsとHenry Carrを含む6名から構成される委員会が発足した。このような経過を経て、植民地政府から借用した建物を図書館の施設として使用することにし、Lagos Libraryが1932年9月に開館した。当初の蔵書数は3千冊に満たなかったが、個人やLagos Book Clubからの寄贈によって1933年末には4829冊、1934年には5766冊、1935年には6785冊と徐々に増えていった。⁹⁾蔵書の半分は小説で占められ、実際に小説の貸出冊数がノンフィクションの2倍であった。図書館の蔵書が増える一方で、分類の必要性が出てきたが、この仕事はヨーロッパ人駐在員の妻達がボランティアで行ったため、既存の図書分類表に基づくものではなく、ナイジェリアに関する図書には頭文字のNをつけるだけというようになりかなりおおざっぱなものであった。この図書館は会員制をとり、入会金は1ポンド、月会費は2シリング6ペンスを利用者から徴収し、一般のアフリカ人にとっては負担が大きく、結果としてヨーロッパ人の利用者が多数を占めることとなった。1933年の会員登録者数はヨーロッパ人が297名であるのに対して、アフリカ人は24名だけであった。⁹⁾

カーネギー財団は会員制という制限はあるものの、「白人もアフリカ人も利用できる図書館」として設立されたLagos Libraryに満足し、西アフリカの図書館設立に対してさらに支援する用意があることをイギリスの植民地省に伝えた。1940年4月にVischerとWrongの報告書に基づき、ナイジェリアのIbadanにおける図書館の設置と移動図書館サービスの開始および黄金海岸における貸出図書館の設置を含めて、3年間にわたり6万3800ドルを出資することを決定したが、第二次世界大戦の勃発により、戦争終結までこの資金を凍結せざるをえなかった。¹⁰⁾

5. 図書館設立と図書館員養成におけるブリティッシュカウンシルの関わり

イギリスの文化普及組織として1934年に創設された「対外関係のための英国委員会 (British Committee for Relations with other Countries)」は、1936年に現在の名称であるブリティッシュカウンシル (British Council) に改称された。この組織は創設当時から英語教育の普及、イ

ギリス人作家の講演ツアー、イギリスで出版された図書の販売促進、図書館と学習書のコレクション構築に力をそそいできた。1941年以降、イギリスの植民地や英連邦諸国への活動を展開し、1943年に西アフリカ地域に拠点をおき、W. M. Macmillanが英領西アフリカ代表として着任した。Macmillanは現地のヨーロッパ人と教育を受けたエリート層のアフリカ人が会費を払って利用する図書館をガーナのAccraやナイジェリア各地に設立することを望んでおり、植民地政府もこれに近い考えであったため、一般庶民が無料で利用できる公共図書館の設立はまだ計画していなかった。従って、英領西アフリカにおいて、現地の人々のための図書館として無料で利用できる公共図書館は戦前は皆無であり、Lagos Library、研究者達の専門図書館、白人利用者のブッククラブおよびガーナのAchimota College (1927年創立)が図書館サービスを提供していた程度にとどまっていた。1944年にブリティッシュカウンシルの図書部門の責任者として着任したJessie Carnellはイギリスの農村部における公共図書館サービスの充実に貢献し、1939年にニュージーランドにおいても同様の図書館組織を構築した。そのような経験から、一般庶民が利用できない会費制図書館には反対の立場をとっていた。

イギリス人のEthel S. Feganは1908年にイギリスのCheltenham Lady's Collegeで図書館員の職につき、その後ケンブリッジの女子学生のカレッジであったGirtonでも図書館員として奉職した。Girtonに勤務していた頃、人類学への関心から1928年に9ヶ月の休暇をとって、調査目的の旅でナイジェリアを訪れた経験があった。その後、1930年から1935年にかけて教育長の仕事や大英帝国らい病救済協会の仕事にたずさわっており、当時の図書館員としては活動範囲の広い女性だったことがうかがえる。Feganはミシガン大学図書館員でカーネギー財団の図書館アドバイザーであったWilliam Warner Bishopの推薦で、1941年2月にガーナに着任した。彼女はさっそく英領西アフリカ地域における図書館の必要性をニューヨークのカーネギー財団と植民地政府に報告するため、1年間にわたって調査した。まずナイジェリアやガーナ各地の図書館や教育機関を視察して回り、当時のAchimota College Libraryが学生や教師だけでなく、一般の利用者にも活用されていることに気づいた。Achimota Collegeは中等教育を終えた人々のための教育機関として1924年に設置され、図書館は当時、蔵書数1万1千冊を超え、ガーナでは屈指の図書館であった。着任して1年後にFeganはカーネギー財団と植民地政府に対してアフリカ人の図書館員養成の必要性を強調し、そのための訓練を行う一時的な学校をカーネギー財団とブリティッシュカウンシルが協力して設立するよう勧告した後、イギリスに帰国した。植民地政府が1944年にこの勧告をやっと承認したものの、カーネギー財団から約束されていた資金は戦争のため、凍結状態で使えなかった。Feganはアメリカで図書館学教育を受けた従妹のKate Dorothy Fergusonとともに、1944年3月に再び西アフリカに着任した。Fergusonはイギリス生まれであるが、第一次世界大戦後にアメリカに在住し、イリノイ大学で図書館学教育を受けた後、いくつかの公共図書館、ヨーロッパやパナマ運河にあったアメリカ軍の図書館、イタリア銀行(後のBank of America)の図書館など図書館における勤務経験が豊富であった。その後も海外での図書館の仕事を探してアメリカ軍や赤十字社などの図書館へ応募していたが、すでに年齢が50代だったこともあって、就職活動は必ずしも順調ではなかった。そのため、勤務地として生活条件の厳しい地域だったにもかかわらず、45年間会っていなかった従姉のFeganの誘いに応じて、ブリティッシュカウンシルの図書館員として採用された。Feganの場合は図書館学校の校長としての雇用であった。しかし、FeganとFergusonは植民地政府やブリティッシュカウンシルの職員達との間で公的な手続きや考え方の違いなどから様々な軋轢を生じていた。

ブリティッシュカウンシル代表の W. M. Macmillan は Fegan が植民地のあちこちに図書館をつくらうとする非現実的な野心家であると警戒し、言葉を交わすことすら嫌がったと伝えられている。¹¹⁾ また、Ferguson は Lagos Library の会費制維持に反対していた Ward Price や Jessie Carnell と対立していた。このような状況であったが、英領西アフリカからの図書館員志望者を集めて、植民地政府やブリティッシュカウンシルからの資金援助を受け、Achimota College において9ヶ月にわたる図書館員養成コースが開始された。受講希望者は14名集まり、その内訳はガーナ人4名、ナイジェリア人6名、シェラレオネ人3名、フランス領だったトーゴからも1名参加した。受講者は講義を受けた後、Achimota School Library において図書館実習も経験した。彼らは1945年6月に養成コースを修了し、イギリス図書館協会の入会試験にも挑戦し、14名中10名が合格した。¹²⁾ Fegan は当初、3年間に及ぶ養成コースを計画していたが、ブリティッシュカウンシルの内部組織であった黄金海岸図書館諮問委員会 (Gold Coast Library Advisory Committee) がこの提案を承認しなかった。そのため、Achimota College の短期コースを修了した受講生の中から2～3名をイギリスでさらに本格的な図書館学教育を受けさせるため、カーネギー財団から提供されていた残りの資金を派遣費用として活用した。Fegan と Ferguson は正式な図書館学教育とまでは至らなかったが、西アフリカにおける図書館員養成のきっかけをつくり、1945年に西アフリカを離れた。皮肉なことに、彼女達と友好関係をもつことがついになかった W. M. Macmillan も1945年に西アフリカを離れ、イギリスに帰国した。

第2章 第二次大戦後の西アフリカの図書館

1. 大学の設立と大学図書館の発展

戦後、ナイジェリアとガーナにおける高等教育に関して進展があった。1945年8月に提出された植民地における高等教育に関するアスキス委員会 (Asquith Commission on Higher Education) の報告書の中で、ロンドン大学が管轄する University College の創設が提案されたのである。委員会はさらにこれらの University College には図書館を設立すべきであるとも勧告していた。その結果、カーネギー財団から財政援助を受けた図書館アドバイザーが図書館の計画立案と蔵書構築に関わることとなった。それに先立ち、1943年6月に Walter Elliot を委員長とする調査委員会が英領西アフリカにおける既存の高等教育機関の組織と施設について調査し、将来の大学の発展に関する勧告を出した。この委員会報告の中で、既存の教育機関における図書館の劣悪な状況が指摘され、Ibadan に設立される University College には適切な図書館を設置することが強調された。これら2つの委員会の報告書における勧告をふまえて、1946年にナイジェリア、ガーナおよびシェラレオネに University College を設立する提案が出されたが、イギリスの労働党政権が反対し、結局ナイジェリアの Ibadan とガーナの Legon にのみ創設されることとなった。こうして1948年10月までに、Ibadan に University College (1962年に University of Ibadan と改称) が設立された。¹³⁾ Ibadan に設立された University College はアメリカのロックフェラー財団、フォード財団およびカーネギー財団からの資金援助を受けた。このときに創設された大学図書館では西アフリカに関するコレクションを集めることが当面の課題となった。

Ibadan に University College が設立された直後、ニュージーランド人の経験豊かな大学図書館員であった John Harris が図書館長として Henry Carr のコレクションの目録作成を担当していた Doris Forsythe を伴って着任した。Harris は、Yaba Higher College (1934年創設) が所

蔵していた1万冊の蔵書に加えて、寄贈図書や私設文庫が図書館にすでに3万冊も所蔵されていることを発見した。これらの資料の保存状態はよくなかったが、1949年末までにForsytheやわずかな職員達とともに1万冊の蔵書の目録作成、分類・排架を手がけた。Harrisはアフリカに関するコレクション（アフリカーナ）を体系的に充実することを重視し、その考えを図書館の資料収集方針に反映していった。その最初の試みとして1950年にIbadanのUniversity Collegeの図書館に対して納本制度を導入することを目指し、政府に出版物に関する法令（Publication Ordinance 1950）の制定を要請した。この法令によって、ナイジェリアで出版された政府刊行物は1ヶ月以内に2部をUniversity Collegeに納入することが義務づけられた。さらにこの図書館はHenry Carrが収集した蔵書やHerbert Macaulayが所蔵していた私設文庫を入手したほか、元イギリス人知事の家族から寄贈されたナイジェリアの言語と文化に関するコレクションやFrederick Montague Dykeが集めた熱帯農業関係の図書1万5千冊も加わり、これらが図書館における蔵書の核をなすことになった。Harrisは欧米の財団へ寄付を依頼したり、他に必要な資料のリストを作成した。また、ナイジェリア北部の個人から入手したアラビア語の写本250冊を利用可能にするため、アラビア語学者を図書館に採用した。こうしたHarrisの努力により、1957年までにUniversity Collegeの図書館の蔵書はおよそ10万冊に達した。この頃、図書館は新しい建物に移り、Harrisは50人の職員（うち6人は専門職）を監督する立場にあった。学長のKenneth Mellanbyはアフリカーナの収集に関心を示しており、図書館に関する事柄についてHarrisに一任していた。ナイジェリアに国立図書館が設置されるまで、この図書館がナイジェリアの資料を網羅した全国書誌であるNigerian Publicationを1968年まで編纂・発行し、ナイジェリアにおける専門資料の収集と書誌サービス機能を担っていた。この大学には後に書店、出版部門、印刷所も作られた。小規模な医学図書室から1966年に正式に設置された医学部の図書館はYabaにあった医学校から蔵書を引き継ぎ、イギリスの王立医学会を始め、海外の図書館からの支援を受けるようになった。1960年から1968年にかけてカーネギー財団からこの図書館に投入された資金はおよそ30万ドルに達した。¹⁴⁾ Harrisは1968年まで20年にわたって図書館に勤務し、ナイジェリアの図書館発展に尽力した業績をたたえられ、「ナイジェリアの図書館の父」とまで称されるようになる。

他方、ガーナのAccra郊外のLegonに1948年に創設されたUniversity of Ghanaは初代学長であるDavid Mowbray Balmeにちなんで命名したBalme Libraryを同年に開館したが、Balme自身はアフリカーナの収集や図書館に対し、IbadanのUniversity Collegeの学長と比べてさほど関心をもっていなかったため、図書館の発展はIbadanのUniversity Collegeよりも若干遅れをとってしまった。戦前、西アフリカの図書館員教育に尽力したEthel Feganがすでに70代と高齢だったにもかかわらず、1948年に再び、ガーナにやって来て、この大学図書館の基礎を築き上げる手助けをすることとなった。彼女はAchimota Collegeから3千冊を移管し、大学図書館の蔵書の中核とした。FeganはUniversity of Ghanaには数ヶ月ただけで、その後イギリス政府の図書館員だったElise Walkerが着任し、5年間奉職した。その間、5万5千冊の図書と1900タイトルの雑誌を受け入れ、1959年にBalme Libraryが新しい建物に移転した時に蔵書は11万5千冊に増加していた。アフリカーナの収集は1961年になってやっと着手されたが、IbadanのUniversity Collegeが所蔵していたアフリカーナのコレクションを超えることはできなかった。

ガーナもナイジェリアもイギリスの大学教育をモデルとしており、上記の二大学では科学技術

分野の講義が開講されておらず、学部もおかれていなかった。そのため、1951年にガーナに Kumasi College of Technology が創設された。ここは1961年に Kumasi University of Science and Technology となり、ガーナでは2番目の高等教育機関となった。後年、ユネスコの支援によって出版業に関する学位取得プログラムがおかれ、附属図書館にはユネスコ、WHO、FAO など国際機関からの寄託資料も収集されるようになる。またナイジェリアには1952年、政令によって3都市 (Zaria, Enugu, Ibadan) に拠点をもつ Nigerian College of Arts, Science and Technology が創設された。この政令は必ずしも大学に図書館の設置を義務づけてはいなかったが、これら二大学はカーネギー財団より図書館設立の補助金として1万ドルずつを受け取っており、その補助金を使って薬理学、工学、建築学、商学、農学、教育学などの科目に関連する資料の専門資料を収集していった。

ガーナは1957年、ナイジェリアは1960年に独立を果たし、大学図書館はイギリスの影響を受けながらも、カーネギー財団からの支援やアメリカ留学から帰国した祖国のリーダー達によって、アメリカの図書館からの影響も徐々に受けつつあった。Dean は西アフリカにおける高等教育と図書館の発展におけるこの時期の特徴として、こうしたアメリカ帰りの人々による影響が顕著であり、その次にイギリスと外部機関からの支援をあげている。¹⁵⁾

ナイジェリアの2番目の大学として、ナイジェリア東部の Nsukka に University of Nigeria が後にナイジェリア連邦共和国の初代大統領となった Namdi Azikwe によって1960年に創設され、翌1961年に図書館が開館した。大学は農学部と工学部および教育研究所をもち、Enugu にもキャンパスをおいていた。この大学はアメリカ国際開発援助庁 (USAID) とミシガン州立大学からの援助と助言を受けていた。図書館の蔵書は Nigerian College of Arts, Science and Technology から引き継いだ資料のほか、ナイジェリア人篤志家からの寄贈による資料ももたらされた。1967年にこの地域で内戦 (ビアフラ戦争) が勃発した際の蔵書数は6万2千冊から10万2千冊の間とおおまかな統計しかなく、大学も図書館も内戦による被害から逃れることができなかった。¹⁶⁾

ナイジェリアの3番目の大学である Ahmadu Bello University (現在の Obafemi Awolowo University) は1962年に北部の都市 Zaria に創設され、ナイジェリア独立後、最初の首相となった Ahmadu Bello の名前にちなんで命名された。この大学は5つの図書館をもち、その中心である図書館が Kashim Ibrahim Library で、現在の建物は1976年に完成した。初代の図書館長にはイギリス人の Wilfred J. Plumbe が就任した。この図書館も Zaria におかれていた Nigerian College of Arts, Science and Technology から2万7千冊の図書や未製本の雑誌を引き継いだ。また、大学外での活動も担当し、1963年中頃に Kaduna の地域図書館と協力して Samaru Public Library の普及活動に貢献した。

1962年に創設された University of Ife もやはり Ibadan にあった Nigerian College of Arts, Science and Technology の4万7千冊を引き継ぎ、図書館の蔵書として受け入れた。この大学は創設当時は建物がまだなかったため、Ibadan の University College に1967年まで間借りし、その後、Ile-Ife に建設された建物に移転した。図書館は1969年に開館した。同年、5番目の大学として Yaba に創設された University of Lagos の図書館も開館当初しばらくはアメリカ国際開発援助庁、ユネスコおよびフォード財団からの支援を受けていた。

ガーナには第三の大学として University of Cape Coast が1962年に創設された。この大学の主な使命は中等教育機関の教員を養成することにあつた。図書館も大学創設とともに設置された

が、開館当初の蔵書はわずか 650 冊しかなかった。¹⁷⁾

2. 西アフリカにおける新たな専門図書館

第1章であげたカカオ研究所など、植民地政府が西アフリカに設立した研究所は独立後もそのまま残され、ナイジェリアにもカカオ研究所が1964年に設立され、図書館サービスを提供していた。西アフリカヤシ油研究所は1964年にナイジェリアヤシ油研究所と改称され、その附属図書館はヤシ全般に関する情報提供を研究者達に行っている。ナイジェリアのKadunaにある地理調査機関図書館はアメリカの炭坑業や給水に関する資料を充実させていた。Yabaにあった連邦研究サービスの図書館は1万2千冊の蔵書を保有し、西アフリカ地域では屈指の専門図書館であった。それらの研究所が収集した資料の一部は独立後に創設された大学図書館に引き継がれる形となった。ナイジェリアはガーナよりも農業研究と研修に関するセンターを多くもち、北部ナイジェリアのSamaruにあった農業研究所図書館(1925年設立)は1962年にAmadu Bello Universityに併合された。1947年にイギリスから3ヶ月の契約で派遣されたHilda Clarkがこの図書館の蔵書の目録作成を手がけ、その後、ナイジェリア人の図書館員がその仕事を受け継いだ。さらにフォード財団、ロックフェラー財団およびアメリカやカナダの開発援助機関によって資金提供を受けた国際熱帯農業研究所が1968年にIbadanに創設され、翌1969年に図書館・ドキュメンテーションセンターがおかれた。ここでは英語だけでなくフランス語で書かれた農業関係資料にも収集範囲を広げている。

新たに設立された社会科学系の研究図書館としては、ガーナに設置されたアフリカ問題に関する研究図書館(Research Library on African Affairs)で、1961年に開館した。ここはアフリカで活躍した政治学者の名前をとって、George Padmore Libraryとして知られており、アフリカに関する文学、歴史、政治および文化に関する資料を収集する図書館であるが、ガーナに国立図書館がなかったため、ガーナ全国書誌(Ghana National Bibliography)の編纂も行っていた。もうひとつの代表的な専門図書館としてはLagosのナイジェリア国際問題研究所(Nigerian Institute of International Affairs)の附属図書館があげられる。この研究所は1963年に設立され、連邦政府からの支援はもちろんのこと、フォード財団、アメリカ政府、カーネギー平和基金からの援助も受けた。この研究所はイギリスの王立国際問題研究所とも研究上の協力関係を結んでおり、サハラ以南のアフリカでは当時、唯一の国際問題専門の研究機関であった。その附属図書館は早くから政府の役人達に対して相互貸借を実施し、資料を貸し出していた。さらに教育関係の専門図書館としては1962年にユネスコと北部ナイジェリア政府が共同でZariaに設立したAdvanced Teachers' Collegeの附属図書館がある。ここでは1968年までに1万5千冊の蔵書を集め、その後Lagos, Enugu, Zaria, Ondoといった都市につくられた教員養成機関に図書館の設置をもたらすという影響を及ぼした。¹⁸⁾

ナイジェリアではビジネス・商業関係の図書館も設立された。まず、1955年にナイジェリア国内で産出する原料を用いて産業を興すことを奨励する連邦産業研究所が設立され、その附属図書館は食料、化学、生産工学、産業分析など多岐にわたる資料を集め、起業家や研究者に提供している。もうひとつは1961年に創設されたナイジェリア中央銀行の研究図書館である。この図書館はアメリカ連邦準備銀行の図書館員の助言を受けて、研究部門の一部としておかれ、ナイジェリア各地にある中央銀行の支店に情報提供サービスを行っている。

3. Evelyn J. A. Evans によるガーナの公共図書館サービスの進展

戦後、ガーナの公共図書館サービスの普及にあたって、最も貢献した人物としてブリティッシュカウンシルの図書館員であった Evelyn J. A. Evans の名前をあげなければならない。Evans は第二次世界大戦が終結した 1945 年 12 月に Accra のブリティッシュカウンシルの図書館担当官として着任した。すでに図書館員として、イギリスで十数年の経験をもち、西アフリカにおける図書館の普及になみなみならぬ意欲を抱いていた。Evans の兄弟が西アフリカの YMCA で働いていた時にブリティッシュカウンシル代表だった W. M. Macmillan と知り合ったことがきっかけで、図書館員を募集していることを知り、ブリティッシュカウンシルに手紙を書いて自分を売り込んだのである。着任後の 1946 年には自ら移動図書館車にのって、ガーナ国内を回り、現地調査をしながら、コミュニティセンター、学校、読書クラブ、鉱山などに 55 の図書箱を配布するサービスを実施した。この図書箱巡回事業は農村部の利用者に好評であったため、その後もしばらく続けられた。また戦前、Aglionby 主教が集めていた蔵書についても 1946 年から Evans が管理を担当した。1946 年初頭、ブリティッシュカウンシルの Angus Gillan は植民地政府の Charles Jeffreys 卿に対し、ブリティッシュカウンシルの蔵書の多くをガーナの図書館に引き継がせるべきであると述べていたが、Evans はそれを実行に移す仕事を担当した。Aglionby 主教の蔵書を加え、1949 年までにブリティッシュカウンシルの所蔵するコレクションは 5 千冊から 2 万 8 千冊に増えていった。さらにこの頃、Evans は児童に対するサービスも開始している。

1950 年 1 月に黄金海岸図書館評議会 (Gold Coast Library Board) が発足する。この組織の法的基盤をなす「黄金海岸図書館評議会に関する法令 (Gold Coast Library Board Ordinance)」が 1949 年 4 月に植民地政府の法律審査会によって承認され、1950 年から施行された。黄金海岸図書館評議会の活動は「黄金海岸開発 5 カ年計画」の中に組み込まれ、全国的な教育システムの一部として、公共図書館の整備を実現していった。これはアフリカ初の図書館に関する法律であり、その後、東アフリカ諸国の図書館サービスに関する法律のモデルとされた。この法律は 1970 年に改正され、ガーナの各地域に地域レベルでの図書館サービスの発展に関する助言を行い、地域の図書館サービスの利用をさらに促進するため、各地域に図書館の諮問委員会を発足させるという新たな任務がつけ加えられた。

黄金海岸図書館評議会に対する政府からの資金援助は 1950 年から 1951 年にかけて 1 万 5750 ポンド、1955 年から 1956 年にかけて 10 万 3310 ポンド、1960 年から 1961 年には 16 万 9350 ポンドと増額されていった。この財源によって、Accra に大規模な中央図書館、地域図書館 2 館、分館数館の設置が実現された。1951 年から 1960 年の間に、国内の識字率は 7.5% から 20% 近くに上昇し、図書館の登録者も 10 倍に増えた。貸出冊数も急増し、4 万冊から 69 万冊を超えるに至った。¹⁹⁾ 1960 年初頭にはガーナの公共図書館全体の蔵書数は 50 万冊近くに達し、70 万人にサービスを提供していた。ガーナ独立後も Evans は現地にとどまり、ガーナ図書館評議会 (黄金海岸図書館評議会がその前身) の会長職を 1965 年まで務め、同年 12 月に辞職した。Evans は 1964 年に著した著書「熱帯地域における図書館サービス」の中でガーナにおける公共図書館普及活動の成功は、初代大統領を務めた Kwame Nkrumah とガーナ政府からの協力なしには達成できなかったと述べている。しかし、この図書館支持者であった大統領は経済政策の失敗によって、1966 年 2 月に中国を親善訪問中、軍部による無血クーデターが起こり、その座を追われることとなってしまった。

ガーナの公共図書館サービスはその後も引き続き、ガーナ図書館評議会が担当し、1967年に國中の学校とカレッジを対象とする調査を実施し、学校図書館部門も発足させた。国内には地域図書館8館、その分館37館、移動図書館のほか、成人と児童のための図書館も整備されていた。イギリスの植民地省から改組されて設立した開発援助庁(ODA: Overseas Development Administration)がガーナ図書館評議会を支援し、ブリティッシュカウンシルが引き続き監督することとなった。ODAは途上国に教科書を低価格で供給する目的で1960年に英語図書協会(English Language Books Society: ELBS)を発足させ、イギリスの出版協会とブリティッシュカウンシルがその活動を支援した。またブリティッシュカウンシルは1971年6月から1987年まで図書提供プログラム(Book Presentation Programme: BPP)を継続し、ガーナだけでなく、サハラ以南のアフリカを中心に教育機関に対する図書の提供に貢献してきた。提供される図書はイギリス国内で出版された図書に限定し、同一タイトルの複本は6部まで供与することが認められたが、逐次刊行物や視聴覚資料は提供対象となっていなかった。

4. ナイジェリア各地域における公共図書館サービスの確立

ナイジェリアは1960年に独立し、1963年10月に連邦共和国制に移行した。1967年に東部地域で内戦が勃発するまで3地域12州から構成され、内戦終結後、地域制を廃止し、1976年に国内を12州から19州に分けた。各州はそれぞれ、知事によって統治される地方分権システムをとることとなった。ナイジェリアの独立後、公共図書館はそれぞれの州の管轄下に入った。1960年代初頭、ナイジェリアの人口はすでに5500万人を超えており、英領西アフリカの4カ国の中ではその面積と人口ともに最大であったが、公共図書館全体の蔵書は25万冊程度で、公共図書館の普及や全体の蔵書冊数という点ではガーナに遅れをとっていた。植民地政府は第二次世界大戦の戦況を宣伝するために設置した読書室(reading room)を戦後、公共図書館に転用しようと試み、カーネギー財団からの資金援助で北部の州にあった読書施設に図書を供給していた。しかし、読書室の開館時間が短く、施設も不十分で、適格な職員を配置していなかったことなどが災いし、公共図書館としての機能を果たすには不十分であった。1940年にすでに発足していた図書館設置に関する政府の諮問委員会が1945年に再び召集され、地域図書館の設置や全国的な中央図書館の組織化を実現するプログラムを勧告した。しかし、1950年までは政府から公共図書館への財政支援はないまま、1951年に3地域の自治政府が成立した。戦後、ブリティッシュカウンシルは事実上、図書館の設置計画から撤退していたが、そのかわりに1951年から1953年にかけてナイジェリア各地域に大規模な図書の寄贈を実施した。1955年にJohn Harrisは「北部地域は図書館サービスを提供しているが法令はなく、東部地域は法令を制定しながら図書館サービスは提供されておらず、西部地域はどちらも存在しない」と述べている。²⁰⁾

Harrisが言及したとおり、当時のナイジェリアにおいては北部地域の図書館サービスが一番活発に行われていた。イギリス人の図書館員Joan Allenが1952年から北部地域で活動していたためである。北部地域はナイジェリアで最大の面積を占め、イギリスの3倍以上に及ぶ広大な地域であり、人口もナイジェリア全体の55%を占めていた。しかし、伝統的にイスラム教圏でコーランに基づく教育を行っていたため、アルファベットの読み書きができる人々は人口の2%にすぎなかった。北部地域にも第二次大戦中に連合軍の戦況を宣伝する目的で各地に読書室が多数設置されており、図書だけでなく、地図やラジオもおかれていた。Joan Allenは着任早々、これらの読書室を訪れたが、その施設は裁判所、会議室、集会所、時には学校として多目的に使

用されており、帰国したヨーロッパ人が残していった本や雑誌をおいてあるだけで、教育意欲のない教師や読み書きもできない人達によって管理されていた。Allenはこの読書室をそのまま地域の図書館に転用するには問題が多いと考えていたようである。それでも1953年初頭、わずか3名の助手とメッセンジャー1名とともにKadunaに地域図書館を設立した際に、学校や文化団体とともに読書室も加えた150以上の組織に対して図書館の配布サービスを実施していった。1957年から1958年にかけて、地域図書館の蔵書は4万5千冊にのぼり、貸し出された冊数は7万5323冊にのぼった。²¹⁾ブリティッシュカウンシルからの1万2千ポンドの財政援助に加えて、地域政府からの支援もあり、Kadunaの地域図書館の設立にはおよそ3万ポンドが投入された。1961年にはKadunaから200マイル離れたBildaに分館を設置する予定だったが、担当者が見つからず開館の時期が少し遅れてしまった。しかし、この分館にはハウサ語などナイジェリアの現地語の資料を含めた4千冊の蔵書が配置された。1963年時点でのKaduna地域図書館の利用登録者数は5616名(うち児童は732名を占めた)であったが、識字率の低さが影響し、人口比でみると5308人あたり1人しか登録者がいなかったのである。²²⁾北部地域のこうした特殊事情にもかかわらず、Allenは図書館活動に関し、多大な成果をあげたことを評価されたが、1958年に退職の意思を表明した。

F. A. Sharrは西オーストラリア州立図書館員で、その夫人も司書であった。彼らは英連邦アフリカ支援計画の後援によって、1962年11月から1963年2月にかけてナイジェリア北部を訪問し、現地の図書館をくまなく調査し、その結果を1963年に「北部ナイジェリアにおける図書館の必要性(通称Sharr Report)」という報告書にまとめた。この報告書の中で、SharrはAllenと同様に、従来からある読書室を公共図書館に転用することについては否定的な考えを述べ、図書館サービスの対象を7年かそれ以上の教育を受けた層にしばるべきであると述べている。Sharrが視察者として選ばれた大きな理由は母国において、広大な地域を対象とした公共図書館サービスを指導した実績があったことによる。しかし、彼もその夫人も非識字者に対する図書館サービスの経験がなく、短期間での調査では現地の識字者達のニーズも十分に把握したとはいなかったと後に述べている。²³⁾北部のナイジェリア人の中に専門職の図書館員が当時わずか1名しかいなかったため、Sharrの報告書の中では北部地域において図書館に適切な人材を供給することが強調されており、図書館員に対する専門教育の実現を勧告した。その結果、地域政府の支援によって1968年にAhmadu Bello Universityに養成コースが誕生した。

北部地域における図書館サービスの普及に貢献したAllenの後任は、Dennis Gunton, R. L. Pierce, D. R. Spilby, R. A. Raddonとめまぐるしく変わり、1968年にJ. A. Faseyiが北部中央州の州都になったKadunaの図書館の責任者に任命された。北部における図書館の発展が他の地域と異なる点として、地域政府が費用のほとんどを負担していたことがあげられる。他方、ナイジェリアの他の地域図書館は、連邦政府や欧米の支援機関からの財政支援に依存していた。

東部地域は1955年に図書館評議会に関する法令を成立させた。東部地域の図書館評議会はガーナ図書館評議会にならって発足された組織で、この法令の成立についてはアメリカで大学教育を受け、1937年に帰国した愛国的な指導者であったNnamandi Azikiweの意見が反映されたといわれている。Azikiweはその後、1963年にナイジェリア連邦共和国が成立した際に初代大統領に就任した人物である。Azikiweはアメリカに滞在した経験から公共図書館の熱心な支援者であり、「公共図書館は人々の大学である」と述べている。²⁴⁾1956年にはナイジェリア人で初めてイギリス図書館協会の会員となったKalu Okorieがこの地域の図書館の必要性に関する調

査を手がけた。Okorieは地域をくまなく回り、以下の4部分からなるプロジェクトを実施するよう勧告した。²⁵⁾

- 1) 地域図書館の本部は Enugu に設置すること
- 2) 移動サービスを伴う分館を 5 館設置すること
- 3) 熱帯地域向けに設計された移動図書館車を入手すること
- 4) 孤立した地域に対しては郵送で図書の送付サービスを提供すること

このプロジェクトは最終的にユネスコの支援によって実現された。ユネスコは1950年にスウェーデンで開催された「成人教育における図書館の役割に関するセミナー」において途上国における基礎的な成人教育の実現を立案し、それを実行する際に公共図書館が果たす役割をすでに強調していた。ユネスコは1950年代に途上国における公共図書館支援活動の一環として、モデル図書館をインドやコロンビアに設立していたが、アフリカではナイジェリアの Enugu が初めて選ばれ、1959年に第三のモデル図書館が設立された。モデル図書館設立の条件として、ユネスコが全額費用を負担するのではなく、現地政府の財政負担も前提条件としていたため、東部地域の図書館評議会がユネスコと5年契約を結び、1957年から1961年にかけてユネスコが17万5千ドルの費用を提供し、東部の地域政府がおよそ6万ドルを負担することに同意した。²⁶⁾ ユネスコが負担した費用の中には移動図書館車の購入費や現地人職員を海外で研修させるための費用も含まれていた。こうして1958年5月に Enugu の周辺地域に初めて移動図書館車が稼動した。さらにユネスコは Enugu にイギリス人の図書館員 Stanley Horrocks を専門家として派遣し、図書館サービスの提供について指導にあたらせた。Enugu の当時の人口はおよそ8万人で、そのうち識字者の13%が図書館に登録し、貸出冊数は開館直後の2年間で17万5千冊近くに達した。²⁷⁾

西部地域では、John Harris と Jessie Carnell が Ibadan において利用者を3グループに分けて実験的な図書館サービスを開始すべきであると考えていた。これらの3グループは、初等教育を終えた英語の読み書きができるグループ、ナイジェリアの言語のみ読み書きができるグループ、言語能力が未発達なグループから構成されていた。Harris も Carnell もともに公共図書館と識字教育のつながりに関心をもっていたのである。これは戦前のイギリス人達が開拓しなかった利用者層であり、当時のブリティッシュカウンシルが想定していた図書館の利用者層をさらに拡大した考え方であった。しかし、西部の地域政府は図書館の果たす役割について深く理解せず、予算も十分に支出していなかった。Ibadan は西部地域の中心都市であったが、Ibadan Public Library はアクセスの悪い場所にあり、蔵書も乏しく、職員は学校の教師か識字能力に乏しい市民や公務を退職した年配者であることが多かった。²⁸⁾ 1953年に Ibadan で開催されたユネスコのセミナーが影響し、1962年になって、Ibadan Central Library が開館し、1965年に策定された「西部地域開発5ヵ年計画」の中に教育省が管轄する図書館サービスの充実策がやっと盛り込まれたのである。

西部地域に戦前からおかれていた Lagos Library は1946年にブリティッシュカウンシルと Lagos 市当局が共同で財政負担して運営されていた。1949年にブリティッシュカウンシルが事業資金の42%を削減したため、資金不足に陥り、図書館の設立プロジェクトから撤退していた。そのため、1950年以降、Lagos Library は Lagos 市当局に引き継がれることとなり、図書館の

名称も1952年にLagos LibraryからLagos Public Libraryに改称した。このとき、ナイジェリア人の図書館員を海外に派遣して研修を受けさせる計画が実施され、Kalu Okorieら3人をイギリスに派遣した。1959年までにLagos Public LibraryはYabaに分館を設置したが、その蔵書は1万1千冊にすぎず、年間の利用者は1500名程度だった。1957年に調査のため西アフリカを訪れたHarold LancourはLagos Public Libraryの建物や蔵書内容の最新性を評価しつつも、未だ会費制をとっていたため、利用者が限定されていることを批判している。さらにフォード財団が招聘し、1963年から1964年にかけてUniversity of Ibadanの図書館学校の客員アドバイザーとしてナイジェリアに着任していたIrving S. Lieberman(ワシントン大学の図書館学校長)もLagos Public Libraryの蔵書内容を欧米の公共図書館と比較し、会費制の撤廃を要求していた。この時期に至ってもLagos Public Libraryは戦前と同様に、図書館の登録や利用にあたって利用者から会費を徴収していたのである。結局、会費の徴収は1975年まで続けられた。

5. 西アフリカの学校図書館と児童サービスの状況

西アフリカに派遣された英米の図書館人達は西アフリカの公共図書館において教科書など識字教育用資料や学習書を蔵書として加えることに重点をおいていなかった。ガーナで公共図書館の基礎を作り上げたEvelyn J. A. Evansですら1956年当時、通信教育を受講している学生達が必要としていた図書を購入する余裕がなかったため、図書館で基本的な図書を用意しただけであった。1960年代初頭のガーナでは教科書やマニュアル類が必要不可欠な読書材であることは議論すらされなかったのである。ナイジェリアにおいても北部の公共図書館サービスの基盤を作ったJoan Allenは図書館サービス向けに教科書を購入することには消極的であり、学習書の購入を必要とする利用者で支払い能力のある人々にはそれらを注文する手助けをしただけである。図書館の利用者の多くが学生や児童によって占められ、彼らの多くは勉学に必要な資料を買う余裕が十分でない利用者達で、図書館でそのような資料を閲覧できる環境が求められていた。それにもかかわらず、英米の図書館人達は母国の公共図書館での実践から、第一に学校図書館が学習用の資料提供を担う役割があり、公共図書館はそういった役割を担う必要はないという考えに固執していたため、利用者が必要としていた学習用資料の提供は当時の公共図書館のサービスの一部として認識しようとはしなかったと考えられる。

ナイジェリアでは学校図書館の設置に関する関心はきわめて低く、大多数の小学校には学校図書館がないといっても過言ではなかった。その主な理由は、学校に資料購入のための予算が十分に支出されていないことと、学校の施設内に資料を収容する図書室のスペースをとることができなかったことがあげられる。中等教育機関と教員養成機関では3千冊から5千冊規模の蔵書を所蔵していたが、蔵書の管理は図書館員ではなく、教員に委ねられていることが多かった。東部地域と西部地域では移動図書館車が学校を巡回し、図書館評議会によって教員向けに学校図書館に関するコースを提供していたし、北部地域の学校に対して、Joan Allenは図書の選書について基準となるようなリストを作成していた。1961年にナイジェリア政府はユネスコに依頼して、全国的な学校図書館サービスの確立に関して助言を求めた。その結果、ユネスコの学校図書館パイロットプロジェクトが1964年からLagosで実施されたのである。ユネスコは学校図書館の専門家であるHarold V. Bonnyを派遣し、学校図書館のデモンストレーションを行ったり、講演や映画会の実施によって、地域の図書館員や一般の人々の関心を引き起こした。当初は訓練を受けた学校図書館員の数がきわめて少なく、彼らの訓練施設もないという問題に直面したが、結果

としてLagosにある40校以上の中等教育機関のうち25校に学校図書館が設置され、常勤の図書館員か司書教諭が配置された。東部地域では学校図書館協会が結成されるという影響ももたらされた。ナイジェリアの学校図書館プロジェクトがある程度の成果をおさめたため、その後、ガーナやタンザニアからも学校図書館の設置や運営に関し、情報提供や助言が求められた。

ガーナにおいては早い時期からガーナ図書館評議会が提供する公共図書館サービスの登録者のおよそ6割を生徒が占めていた。ガーナ教育省の支援の下で中等教育機関とカレッジに移動図書館車を巡回させていた。移動図書館車を巡回させることによって、生徒達に教科書以外の読書を促進するため、借りた本を家で読めるよう、個人貸出を積極的に行っていた。加えて、ガーナ図書館評議会には学校図書館部門もおかれるようになった。それでも1959年まではガーナ図書館評議会による学校図書館への巡回サービスは国中のすべての地域をカバーしておらず、特に小学校に対しては十分ではなかった。移動図書館車に搭載する図書の選書は職員と生徒が共同で行ったが、人気のある本は数が十分でないことが多く、海外（主にイギリス）から本を輸入するには時間も資金もかかったのである。ガーナ図書館評議会はカーネギー財団からの職員研修費用の支援のほか、イギリス教育・福祉基金からの寄付をもとに児童のための図書館施設の拡充とKumasiに地域図書館を建設する費用の一部を確保した。

6. ナイジェリア国立図書館の成立

ユネスコは1958年にヨーロッパ各国の国立大学図書館長を集めてウィーンでシンポジウムを開いた。ここで、国立図書館の目的と機能についての合意を得た。その際、国際図書館連盟(IFLA)の国立および大学図書館部会を通じて国立図書館に関する情報やアイデアの交換を行ってきた。1960年代後半、ユネスコは全国情報システム(NATIS)の計画推進を発表し、図書館サービスの普及と国立図書館の重要性を広めようとしていた。そのため、1971年にユネスコは国際図書館連盟に財政援助を行い、英語圏の途上国から図書館員をリバプールに招聘し、国立図書館の重要性と国際的な図書館協力について討議した。フランス語圏諸国についても1973年にグルノーブルで同様の会合をもった。しかし、発展途上国の中には国立図書館を設立せずに、公共図書館のサービス網を構築する目的で設置された図書館評議会が国立図書館機能を担っている国があり、英語圏の西アフリカではガーナとシエラレオネがそれに該当する。

ガーナは前述したように、Evelyn J. A. Evansの努力によって、1950年に国内に公共図書館サービスを普及させることに成功していたが、国立図書館の設立は視野に入れていなかった。1970年代後半までUniversity of Ghanaの図書館とアフリカ問題に関する研究図書館2館が国内の図書館サービスと全国書誌の作成に関して国立図書館の機能を果たしていた。当時この2館の蔵書数はあわせて80万冊を超えていたが、これらは主に貸出用資料として活用されていた。²⁹⁾

シエラレオネは独立前の1959年6月に制定した国内法の中に、シエラレオネ図書館評議会(Sierra Leone Library Board)の発足を規定した。シエラレオネ図書館評議会は、1959年8月にガーナからEvelyn J. A. Evansを最初の会合に招聘したが、これはガーナ図書館評議会が実践していた手法を国内に導入するにあたって助言を求めるためだったと考えられる。シエラレオネ図書館評議会の目的は、公共図書館サービスを国内に普及することで、具体的には国内3ヵ所においた地域図書館と7つの分館に図書館サービスを運営させることにあった。まず首都のFreetownに中央図書館をおき、1961年にブリティッシュカウンシルの蔵書と家具を受け継ぎ、1962年出版法の修正案によって、この中央図書館に納本制度を義務づけた。そして納本された

資料をもとに全国書誌を編纂し、国立図書館機能を中央図書館に担わせることにした。³⁰⁾ 中央図書館の建物はブリティッシュカウンシルから3万5千ポンドの資金が提供され、1964年1月に完成した。³¹⁾

ガンビアは1946年にブリティッシュカウンシルによって設立された最初の公共図書館(会費制図書館であった)を1976年に国立図書館とした。この国立図書館は公共図書館部門をもっている。

ナイジェリア国立図書館は1964年に根拠法となる国立図書館法が制定されて設立した。国立図書館の設立については独立を果たした1960年に政府によってすでに計画されており、フォード財団の支援による予備調査を実施していた。フォード財団はアメリカ国立医学図書館長だったFrank B. Rogersを派遣し、1961年にLagos地域の図書館を3週間にわたって調査させた。Rogersは国立図書館は当時の首都であったLagosに設立し、書誌センター機能をもたせるが、ガーナのように公共図書館システムを運営する機能は担わせないことを勧告した。フォード財団のJ. Donald Kingsleyはアメリカのような議会図書館を設置して国立図書館機能をも担わせることを考えていたが、この案は実現しなかった。1962年初頭に「フォード財団技術援助プログラム」のもとに、アドバイザーとして招聘されたCarl M. Whiteはコロンビア大学の図書館学部長を辞職した後、フォード財団で図書館開発プロジェクトを任せられ、1962年にナイジェリアに赴いた。そして彼を中心に具体的な開館準備作業が遂行されていった。アメリカ政府からはナイジェリア独立のお祝いとして、ナイジェリア国際問題研究所の図書館に対し、すでに10万ポンド相当の資料や設備が贈られていた。³²⁾ この研究所と国立図書館を同一の建物に収容し、隣の建物に2つの図書館共通の書庫を備え付けることとした。ナイジェリア国際問題研究所はすでにドイツ政府から建物を供与されており、イギリスから講演ホール、アメリカからは図書館の設置を支援されていた。Rogersはフォード財団に対して国立図書館の建物、18ヶ月分のアドバイザーへの謝礼、18ヶ月分の相談業務、IbadanのUniversity Collegeへ職員を送るための奨学金、蔵書購入費用など合わせて73万9200ドルの支援を要請したが、財団は建物への支出を承認しなかったため、その他の経費として46万8千ドルを提供した。³³⁾ Whiteのプロジェクトは1964年で終了し、彼の後任としてアドバイザーとして就任したのがニュージーランド人のA. Priscilla Taylorである。Taylorは母国とアメリカで20年に及ぶ図書館勤務の経験があり、1962年にシンガポールの国立図書館設立に関わっていた。彼女はアドバイザーとして16ヶ月間活動した後、John Harrisと結婚し、離職した。最後のアドバイザーとなったのがアメリカ人のPhilip Rappaportで、前任者のTaylorの方針を継承し、事実上、ナイジェリア国立図書館長として1971年まで奉職した。Rappaportはその間、1968年に北部地域における図書館の現状を視察するため、Kadunaを訪問している。Rappaportが離任した1971年にフォード財団からの支援が終了した。最終的にフォード財団からの寄付金の多くは欧米から派遣された図書館員の給与に消え、残りが書誌の編纂、資料購入と設備費、奨学金および職員の旅費に支出された。³⁴⁾

ナイジェリア国立図書館は1963年に閣僚会議によって情報省の一部とすることが決まっており、国立図書館法に基づき、国立図書館の活動範囲は連邦政府領内に限定することが規定されていた。図書館長の適任者としてナイジェリア人を起用しようとしたが、断られ、ビアフラ戦争(1967~1970年)が終結し、Rappaportが離任した後、副館長だったS. B. Ajeが館長に就任した。国立図書館法は1970年に改正され、理事会によって統括され、国内のすべての州に分館をおくというユニークなシステムをとることとなった。またこの法改正によって、法定納本制度が

確立され、政府刊行物は刊行後、ただちに50部ずつを国立図書館へ送付し、国内で出版されたすべての図書を国立図書館に納入することが義務づけられた。この納本制度によって、ナイジェリア全国書誌(National Bibliography of Nigeria)の内容もさらに網羅的になっていった。元々、ナイジェリア全国書誌の編纂は1950年の出版法令により、IbadanのUniversity CollegeによってNigerian Publicationsという名称で刊行されてきたが、それを国立図書館がやっと引き継いだのである。1950年の出版法令はナイジェリアの3地域の政府に対し、それぞれの地域図書館と高等教育機関を指定して、出版物を保存するよう求めていたが、国立図書館法の改正によって、その役割は連邦政府と各州の政府に委ねられることとなった。

国立図書館の役割は主に調査・レファレンス機能を中心としており、EnuguとJosにおいた分館を通じて、児童を除く、すべての国民に対するサービスを提供することである。しかし、実際の利用者の大半は学生であった。国立図書館は国内の図書館に関する統計を集め、書誌センター機能も担っていた。図書館間の相互貸借を促進するため、1963年には国内総合目録(National Union Catalogue)の編纂を開始した。国立図書館は1900年以前に遡るナイジェリアに関する資料(Nigeriana)を網羅的に収集する責務を担うほか、国連の出版物やイギリスの政府刊行物を集めた専門コレクションも構築している。1970年代中頃の蔵書冊数は15万冊を数え、マイクロフィルムが7千リール、雑誌は2500タイトルで、職員数は300名ほどが在職し、そのうち30名は図書館学の専門教育を受けた職員であった。³⁵⁾

第3章 西アフリカにおける図書館学教育の実施と図書館協会の成立

1. 図書館職員に対する基礎訓練の実施

ガーナの公共図書館サービスに貢献したEveryn J. A. Evansは当初、アフリカ人に対する大学レベルでの専門的な図書館学教育よりも図書館職員の基礎訓練に重点をおいており、しばらく中断されていた西アフリカ人のための図書館員養成コースをガーナに着任後から再開していた。黄金海岸図書館評議会が1950年に発足し、図書館サービスの進展だけでなく、それを支える図書館員の養成にも責任を負うこととなったためである。EvansはFeganが戦前に使っていたAchimota Collegeでの訓練を小規模ながら継続し、遠隔地にいる訓練希望者のための通信教育も実施していた。ブリティッシュカウンシルからKumasi College of Technologyの図書館に派遣されていたJessie Carnellは図書館の指導者を養成するよりも現地の図書館で即戦力となるような職員の養成にまず着手すべきであり、管理職や指導者はその中から、性格、知性、仕事に対する厳格さや責任感、経験によって決められるべきであると主張していた。Evansはそれぞれの図書館やガーナ図書館評議会によって実施される実務研修を行うことによって、イギリス図書館協会の初級資格試験に合格できるような人材を育成し、それから彼らを図書館学校へ進学させるべきであると考えていた。さらにイギリスへアフリカ人図書館員を派遣し、専門教育を受けながら、イギリスの模範的な図書館を訪問する機会を与えられるという利点も考慮していた。そして、1950年から1961年の間にカーネギー財団の基金によって、黄金海岸図書館評議会から17名のガーナ人がイギリスにおいて図書館学教育を受けることとなった。³⁶⁾

他方、ナイジェリアでは1950年当時、IbadanのUniversity CollegeでJoan AllenとJohn Harrisが図書館で働く人々のための基礎訓練を指導していた。図書館に関する基礎的な内容を盛り込み、図書の出版方法、発注方法、書架の排架方法、図書の補修法、参考図書の利用法、適

切な図書館家具に関することを教えていた。³⁷⁾ Joan Allen は 1952 年に北部地域でも同様の訓練を実施した。1956 年には東部地域でも 5 人の図書館補助員のための訓練が始まり、ブリティッシュカウンシルや外部機関からの支援を時々受けていたようである。ガーナと同様に、訓練を受けた者の中から、特に優秀な者をイギリスに送ってさらに教育を受けさせた。1963 年以降、東部地域の図書館評議会は訓練形態を再編成し、2つのコースに分けた。1つは職場内訓練によって評議会から提供される図書館サービスにそった形で、実践的な図書館の組織と運営を学ぶもので、もう1つは訓練を受けた図書館補助員にイギリス図書館協会が実施する資格試験を受験する準備させるためのコースであった。

他方、シエラレオネでは Fourah Bay College において図書館補助員を養成するコースだけがおかれ、大学に図書館学校を設立するまでには至らなかった。そのため、専門職となるための教育は他の国々に行って受けるしかなかったのである。ガンビアでは 1963 年にイギリスで図書館員教育を受けた女性司書が 1 名誕生したが、1970 年まで国内に専門職のための養成コースがおかれることはなかった。

2. 西アフリカ図書館協会の成立

1953 年、ナイジェリアの Ibadan においてユネスコが 4 週間にわたり「公共図書館の発展に関するセミナー」を主催し、29 名の図書館員や教師が出席した。うちアフリカ人の出席者は 8 名であった。このセミナーはアフリカで最初の公共図書館に関する会議として知られ、以下の 3 つのグループに分かれて議論が行われた。

- 1) 地方および全国規模の公共図書館サービスの組織
- 2) 出版物、視聴覚資料の選択と提供
- 3) 公共図書館における専門職員の養成

このセミナーにおいて、「アフリカの様々な地域で働く図書館員はただちに強力な図書館協会を発足するため、実務的な段階をとるべきである。このような専門職のための協会はアフリカにおける図書館の発展を奨励し、支援することを目的とした行動計画を入念に立案すべきである」との勧告が出された。この勧告を受けて、アフリカで初めての図書館協会である西アフリカ図書館協会 (WALA: West African Library Association) が発足した。1954 年に Lagos で開催された西アフリカ図書館協会の発足式にはナイジェリア人 27 名とガーナ人 7 名が参加した。³⁸⁾ この組織の目的は西アフリカの図書館に関心のある人々を結びつけ、情報やアイデアの交換を行う場を提供することにあった。西アフリカ図書館協会の創設委員会の構成員は 11 名で、4 名が欧米からアフリカに派遣されていた図書館員 (John Harris, Evelyn J. A. Evans, Jessie Carnell など)、3 名がアフリカ人図書館員、2 名が教師で、あとの 2 名はそれぞれ行政官と出版社の代表であった。John Harris が会長職を二期務め、1961 年からはナイジェリア人の Kalu Okorie がアフリカ人で初めて会長に就任した。西アフリカ図書館協会発足当時、Okorie のほかにイギリス図書館協会の会員となっていた西アフリカ人はガーナの G. M. Pitcher だけであった。黄金海岸図書館評議会は Accra で現地の図書館員に対する基礎訓練をすでに提供していたし、Ibadan にある University College の図書館においても同様の訓練の機会が提供されていた。西アフリカ図書館協会はナイジェリアの連邦政府と地域政府に対し、希望者に海外で図書館学教育

を受けさせるため、奨学金の提供を求めた。1960年以前には西アフリカ人に対する図書館学教育の機会は少なかったにもかかわらず、西アフリカ図書館協会の会員数は1954年に107名、1956年に159名、1961年には226名と着実に増えたが、会員はナイジェリア人が圧倒的に多かった。³⁹⁾

西アフリカ図書館協会の会合は主にナイジェリアのLagosかIbadan、ガーナのAccraかKumasiといった都市で開催され、委員長のJohn Harrisは会合になかなか出席できない会員に会合の詳細や情報を知らせるため、1954年3月、West African Libraries (1955年にWALA Newsとタイトル変更)の刊行を開始した。この会員向けの雑誌はIbadanの大学出版局によって不定期ではあるが、1955年から1962年にかけて16号まで刊行された。これは当時、サハラ以南のアフリカで出版された唯一の図書館関係の専門雑誌であった。また1956年の西アフリカ図書館協会の会合において、ナイジェリアやシェラレオネに対し、1949年に制定された黄金海岸図書館評議会の法令を模範とした法令の採択を勧めた。ナイジェリアでは1955年に東部地域の図書館評議会に関する法令が可決されただけにとどまり、他の地域ではこのような法令の制定は具体化されなかった。その後、西アフリカ図書館協会のナイジェリア支部は連邦政府に対し、図書館諮問委員会の設置を求め、この委員会が後に国立図書館創設に重要な役割を果たすことになる。

西アフリカ図書館協会は自発的な会員組織であり、財源は会費に依存して運営されていて、政府や外部機関からの財政援助を受けなかった。しかし、カーネギー財団に対しては1955年にガーナ人とナイジェリア人のためにイギリスあるいはアメリカの図書館学校で教育を受けるため奨学金の支援を要請している。西アフリカ図書館協会は当該地域における図書館員養成のための委員会を発足させ、以下の事柄について検討した。⁴⁰⁾

- 1) 西アフリカ地域に図書館員訓練センターを設立する可能性
- 2) イギリスやアメリカの図書館学校で1年につき4名のガーナあるいはナイジェリア人を研修させるためのカーネギー財団による資金援助の可能性

西アフリカ図書館協会から提案されたこれらの可能性を探るため、カーネギー財団は当時、イリノイ大学で図書館学を教えていたHarold Lancourに、英領西アフリカの図書館に関する調査を要請した。西アフリカ図書館協会の関係者は1957年10月にLancourの視察旅行に協力した。Lancourはカーネギー財団に1958年に提出した図書館学教育の計画に関する報告書(通称Lancour Report)の中で、IbadanのUniversity Collegeに西アフリカ人のための大学院コースの設置を勧告している。⁴¹⁾ Lancourはカーネギー財団が西アフリカにおける図書館の発展を効果的に支援するには図書館に適切な人員を配置し、その訓練のために資金提供をすべきであると述べている。また、イギリスやアメリカにアフリカ人を派遣するための奨学金を出すことについては限られた数の人員しか送れないため、否定的な見解を述べ、当該地域での訓練を実施した方が地域の実情やニーズに直接関連づけられるという点を強調した。西アフリカ図書館協会のガーナ支部の関係者達はイギリスで図書館学教育が受けられる奨学金の支援を強く望んでいたため、この勧告には落胆したが、ナイジェリア支部はLancourの勧告を歓迎した。ガーナは当時、カカオ貿易でナイジェリアよりも経済状態がよく、ガーナ国内の公共図書館サービスがEvansの尽力でナイジェリアよりも発展していた事実にもかかわらず、ナイジェリアのIbadanのUniversity

College が選ばれた最大の理由はやはり John Harris の存在によるところが大きい。またこの大学がロンドン大学と提携関係にあったことも理由の一つにあげられる。当時のイギリスにおいて図書館員養成は主に Polytechnic において行われていたが、大学で養成コースをもっていたのはロンドン大学だけであった。シェラレオネの Fourah Bay College は西アフリカで最も歴史ある高等教育機関であったが、西アフリカ図書館協会で活発に活動する会員がいなかったため、当初から図書館学校設置の可能性はきわめて低かった。

西アフリカ図書館協会はガーナとナイジェリアの独立に伴い、1961年に解散し、ナイジェリア図書館協会とガーナ図書館協会に分かれた。ナイジェリア図書館協会は機関紙 Nigerian Libraries を発行し、加えて1964年から NLA newsletter も刊行したが、配布された範囲は広くなかった。ガーナ図書館協会は1963年から Ghana Library Journal を発行したが、1973年に発行中止となり、1987年に GLA newsletter が発行されるまで、図書館の専門雑誌が国内で刊行されることはなかった。⁴²⁾

3. 大学における図書館専門職員の養成

ユネスコのセミナーでの議論や Lancour Report の勧告を受け、1960年には Ibadan の University College にカーネギー財団からの8万8千ドルの資金援助がもたらされ、図書館学校 (Institute of Librarianship) が開学し、6名の学生が入学した。これは西アフリカにおいて、高等教育機関に設置された最初の図書館員養成機関であるが、サハラ以南のアフリカにおいても最初の図書館学校となった。図書館学校設立の立役者であった John Harris はアフリカの図書館の指導者を養成しようと考えていた。当初のコースは2年制で図書館での実習も含まれていた。大学卒業者が入学の条件であったが、大学を卒業していなくても、すでに2年間の図書館勤務経験をもっていれば入学させた。学生はイギリス図書館協会の資格取得試験のための準備期間に1年間をあて、さらにアフリカの図書館についての研究も課せられた。

その後、この図書館学校は Department of Library, Archival and Information Studies (LARIS) と改称された。1963年にカーネギー財団から11万2千ドルの資金を得て、1964年にはナイジェリア国立図書館の設立にも関わった Irving Lieberman が養成コースを再編成した。1966年にはカーネギー財団から8万4千ドルの資金援助を受け、この年からは入学の条件として大学の学位取得者であることと、英語以外にもう一つの言語を使いこなせることというアメリカの図書館学校と同様の高い条件を課せられることとなった。図書館学校の運営は1968年までカーネギー財団からの資金によって支えられ、その後は大学や政府からの資金でまかなわれるようになった。図書館学校は1969年から教育学部の一学科となり、修士課程と博士課程を導入した。他方、大学卒業資格を問わない中級職員の養成も1970年から1年間の資格取得プログラムとして開始された。

すでに図書館員のための基礎訓練を行っていたガーナでは、ガーナ図書館評議会がマンチェスターの図書館学校長だった J. C. Harrison に依頼し、ガーナの図書館学教育について諮問した。その結果、イギリス図書館協会の資格試験のためのコースは継続し、大学卒業でなくても教育が受けられる図書館学校の設立が勧告された。この学校はガーナ図書館評議会が運営することとした。こうして1961年に Ghana Library School が設置されるが、実際の教育は1962年1月まで行われなかった。入学条件はガーナ人に限定されたが、中等教育を受けた者であれば、図書館での勤務経験の有無は問われなかった。ガーナでは当時大学卒業者の数がそれほど多くなかった

ためである。1962年の開講時にはガーナ人だけでなく、ナイジェリア人や図書館学校のなかったシェラレオネからも入学者があった。コースは2年制で1965年までに48名が資格を取得していった。⁴³⁾ Ghana Library Schoolは1965年にUniversity of Ghanaの社会科学部に併合され、3年制の学位取得プログラムが誕生した。初年度に英語、フランス語、政治学、社会学、哲学、言語学、経済学、歴史、地理学のうち3つの科目を履修し、あとの2年間で図書館学の専門分野についての講義を行う形態をとり、初年度の入学者は10名であった。1967年に学部コースを廃止し、大学卒業者を対象とする2年制のコースを設置した。このコースは1969年に1年制となった。加えて1971年には大学院修士課程を開設した。しかし、入学者数はナイジェリアの大学に比べて少なく、そのコースの受講生も10名に満たなかった。1970年代初頭、この図書館学校はユネスコと国際文書館評議会(ICA)およびガーナ政府の後援を受けて、国際連合開発計画(UNDP)からの資金援助によって図書館員とアーキビスト養成の学部(Department of Library and Archival Studies)に再編され、現在まで多数のガーナ人図書館員やアーキビストを輩出している。

ナイジェリア北部ではAhmadu Bello Universityが大卒者を対象に2年間にわたって大学図書館で職場内訓練を実施し、その修了者をさらに専門資格取得のため、海外へ派遣した。さらに1968年に図書館学科を設置し、図書館員養成を開始した。Ibadanやガーナの図書館員養成コースはイギリスの図書館員養成レベルに準じようとするものであったが、北部の場合は北部地域政府の要請に応じて、1970年から3年制の図書館学の学位取得プログラムと中級職員養成用として資格取得が可能な2年制のプログラムの2種類に分けて開講された。なお、この大学においても大学院修士課程が1969年に設置されている。

あとがき

西アフリカに限らず、途上国において図書館システムを発展させるために重要な要因として先進国と同様に、図書館を支える施設、人材、予算、利用者があげられるが、それに加えてその国の出版基盤がある程度、形成されているかどうか問われる。本稿では主に西アフリカの図書館の歴史的背景を述べることに主眼をおいたため、当該地域の出版について深く踏み込まなかった。アフリカの出版基盤の弱さについてはガーナ大統領だったKwame Nkrumahが1963年にロンドンで開催された英連邦会議において、出版のための経験が欠如していることについて述べ、イギリスの出版大手のマクミラン社が合併企業による支援を申し出て、ガーナ出版会社を立ち上げた。出版基盤の整備にしてもこのように宗主国であったイギリスの経験をアフリカに適用せざるをえなかったのである。その後、西アフリカや東アフリカに徐々に設立されていった出版社によって、アフリカ出版者ネットワーク(APNET: African Publishers Network)が欧米からの支援で発足し、現在はジンバブエでアフリカ図書市が開催されるようになり、アフリカで出版された図書の流通状況は改善されつつあるものの、年間の出版点数は国によって未だ大きな差がみられる。現在、コンピュータを使った出版方式(DTPなど)がアメリカや先進国で主流になっている影響を受けて、アフリカの図書館学校では出版に関する講義を取り入れているところがある。

図書館の蔵書に関しては予算不足に悩む図書館は館種を問わず、欧米の政府やNGOからの寄贈に未だ依存している国々は西アフリカだけでなく、アフリカ全土に及ぶ。1980年代から1990

年代にかけてアフリカの大学図書館は資金不足のため、学術資料の購入費が十分捻出できない厳しい財政状況にあった。当初は欧米で不要になった資料を押しつけられる形で受け入れるしかなかったが、これについてはアフリカの各図書館からの要望を受け入れる努力が続けられ、こうした問題は改善されつつある。現在、アフリカの図書館に対し、イギリスの Book Aid International (BAI) という NGO が多数の図書資料の寄贈に貢献しており、この組織はイギリス国際開発省 (旧 ODA) から資金援助を受けている。ガーナに公共図書館サービスの基盤を築いた Evelyn J. A. Evans は、1970 年代から 1980 年代にかけて BAI の顧問として受け入れ国のニーズに見合う図書の寄贈に関する調査を行うことで貢献した。また、アメリカの科学の進歩に対する協会 (AAAS : American Association for the Advancement of Science) が 1987 年以降、雑誌購読予算の不足に悩むアフリカ 38 カ国の大学や学術図書館に対し、アメリカの科学技術系出版社の協力を得て、雑誌の寄贈を行っている。

アフリカにおける図書館や情報分野への支援団体は前述したように、戦前はアメリカとイギリスの組織が主体であったが、1961 年にコペンハーゲンで「アフロ・スκανジナビアン図書館会議」が開催され、北欧諸国の途上国支援組織も参画するようになった。北欧の組織は図書館への支援を含め、途上国に対する中立的な支援を旨としており、自国でも価値があると評価できるような支援分野に協力を行う方針を貫いている。また 1972 年には旧イギリス領だった 20 カ国の図書館協会によって、英連邦図書館協会 (COMLA : Commonwealth Library Association) がナイジェリアで結成された。この地域間組織は、加盟国間の図書館員達が図書館サービスをさらに充実させるための情報交換を行ったり、研究プロジェクトも手がけている。カナダは英連邦図書館協会の構成国の中でも図書館先進国であり、途上国の開発援助のための組織である国際開発研究センター (IDRC) がアフリカ諸国の図書館や情報センターにおいて 1970 年代から様々な技術支援を行っている。アフリカの植民地化に直接関わらなかった北欧やカナダの援助機関の活動は主に東アフリカや南部アフリカで展開されているものが多いが、ガーナは 1980 年代にデンマーク開発援助庁 (DANIDA) からの支援を受けている。他に様々な欧米の NGO 組織が図書やコンピュータなど機器の寄贈、出版活動への支援、図書館の情報システム構築など様々な形で途上国の図書館支援に関わっている。

図書館員養成に関してはナイジェリアとガーナの大学に正式な養成コースがおかれ、それに関わったイギリスの図書館員達は、イギリスと同様のレベルの教育方式を導入しようと試み、イギリス図書館協会の資格試験に合格できるレベルの職員を養成する努力を行ってきた。さらに将来見込みのあるアフリカ人図書館員に対して、アメリカの財団やブリティッシュカウンシルが海外での学位取得を奨励するため、彼らに奨学金を授与するなど経済的な支援を行ってきた。ナイジェリアの大学ですでに 1960 年代後半に図書館学の修士課程と博士課程が同時に開講されていたのは驚くべき発見であった。ガーナもナイジェリアも独立後、10 年足らずで大学院における専門教育を実現し、図書館員の専門教育の基盤を作り上げてしまうのである。さらにこの 2 カ国は早い時期から中級職員と専門職員の養成方式を区別していた。他方、日本では司書の資格は未だに短期講習でも取得が可能であり、大学で学部レベルの教育を受けても最終的に取得できるのは「司書」という同じ資格である。日本では戦前から文部省によって実施されていた図書館職員研修所が唯一の図書館員養成コースであったが、大学の学部レベルでの図書館学教育は、1951 年にアメリカのロックフェラー財団から資金援助を受けた Japan Library School が慶応義塾大学に設置された時に始まる。大学院レベルの教育はさらに学部教育の開始から 16 年後の 1967 年

に同大学に修士課程がおかれてからであり、博士課程は同大学で1975年に始まるのを待たねばならなかったのである。日本は高度経済成長期の1960年代から1970年代に図書館の数が増えていったにもかかわらず、専門教育として学部課程での養成から大学院博士課程の設置に至るまで実に25年の年月を費やすこととなった。

Amadiは著書「アフリカの図書館：西欧の伝統と植民地時代の洗脳」の中で、宗主国が植民地に図書館や教育システムを持ち込み、彼らの言語を押しつけることによって、昔からアフリカで行われてきた口承による教育システムを根源から覆してしまったことを「文化帝国主義」と名づけている。具体的には植民地主義者は彼らの文明を植民地に定着させる道具として教育システムと図書館を使ったと批判している。⁴⁴⁾ 図書館の普遍的な役割は、その国の文献遺産を保存し、後世の時代に継承していくことと、人々の生活の向上につながるような図書や情報の提供にある。前述したように、ガーナやナイジェリアでは独立後もしばらく現地にとどまり、John HarrisやEvelyn J. A. Evansのようにリーダーシップを発揮して、図書館の設立や人材の育成に貢献した図書館員もいた。彼らなしで、果たしてガーナやナイジェリアに後のアフリカ諸国のモデルとなるような図書館システムを短期間で構築することができただろうか。また、彼らは図書館学教育を受けたアフリカ人に図書館の運営を任すことができるようになるまで、独立後もアメリカの財団などから資金援助を引き出す努力を惜しまなかった。少なくともこの点は評価に値すると考えられる。

注

- 1) Maack, Mary N. "The colonial legacy in West African libraries: a comparative analysis." In: *Advances in librarianship*, v.12, 1982. p.190
- 2) Maack, Mary N. 前掲1) p.194
- 3) Maack, Mary N. 前掲1) p.195
- 4) Maack, Mary N. 前掲1) p.195
- 5) Olden, Anthony *Libraries in Africa: pioneers, policies, problems*. Lanham, MD: Scarecrow Press, 1995. p.54
- 6) Harris, John "Twenty years of library development: libraries and librarianship in Nigeria at mid-century." In: *Classical readings in African library development*. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.42
- 7) Rochester, Maxine K. "American philanthropy abroad: library program support from the Carnegie Corporation of New York British dominions and colonies fund in the 1920s and 1930s." *Libraries & Culture*, v.31, no.2, Spring 1996. p.343
- 8) Olden, Anthony 前掲5) p.50
- 9) Olden, Anthony 前掲5) p.51
- 10) Olden, Anthony 前掲5) p.58-59
- 11) Olden, Anthony "An African pioneers." *Library Association Record*, v.99, no.2, Feb. 1997. p.97
- 12) Akinyotu, Adetunji "A comparative study of education for librarianship in West Africa." In: *Classical readings in African library development*. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.129
- 13) Harris, John 前掲6) p.46
- 14) Burgess, Robert S. "Education for librarianship: US assistance." *Library Trends*, Jan. 1972, p.519
- 15) Dean, J. "Organization and services of university libraries in West Africa." In: *Comparative and international librarianship: essays on themes and problems*. Westport, CN: Greenwood Press, p.111-

118

- 16) Adegoke, Adekunbi “The evolution of libraries in Nigeria.” In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.80-81
- 17) Badu, Edwin Ellis “Technology in university libraries in Ghana.” Aslib Proceedings, v.42, no.3, March 1990. p.112
- 18) Adegoke, Adekunbi 前掲16) p.87-88
- 19) Maack, Mary N. 前掲1) p.212
- 20) Maack, Mary N. 前掲1) p.214
- 21) Maack, Mary N. 前掲1) p.214
- 22) Olden, Anthony 前掲5) p.102
- 23) Olden, Anthony 前掲5) p.103
- 24) Adegoke, Adekunbi 前掲16) p.63
- 25) Maack, Mary N. 前掲1) p.215
- 26) Maack, Mary N. 前掲1) p.215
- 27) Maack, Mary N. 前掲1) p.216
- 28) Adegoke, Adekunbi 前掲16) p.67
- 29) Aje, Simeon “National libraries in developing countries.” In: Advances in librarianship. v.7, 1977. p. 117
- 30) Aje, Simeon 前掲29) p.132-133
- 31) Dillsworth, Gloria E. “The Sierra Leone public library service.” In: Information and libraries in the developing world 1: Sub-Saharan Africa. compiled and edited by Michael Wise and Anthony Olden. London: The Library Association, 1990. p.108
- 32) Olden, Anthony 前掲5) p.111
- 33) Olden, Anthony 前掲5) p.111
- 34) Olden, Anthony 前掲5) p.117
- 35) Olden, Anthony 前掲5) p.117
- 36) Maack, Mary N. 前掲1) p.224
- 37) Akinyotu, Adetunji 前掲12) p.130
- 38) Maack, Mary N. 前掲1) p.224
- 39) Maack, Mary N. 前掲1) p.224
- 40) Bozimo, D. O. “John Harris and education for librarianship in Nigeria.” In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.172
- 41) Lancour, Harold “Libraries in British West Africa: recommendations.” In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003 p.3
- 42) Prichard, R. J. “African librarianship periodicals.” In: Information and libraries in the developing world 1: Sub-Saharan Africa. Compiled and edited by Michael Wise and Anthony Olden. London: The Library Association, 1990. p.189
- 43) Akinyotu, Adetunji 前掲12) p.139
- 44) Amadi, Adolphe O. African libraries: western tradition and colonial brainwashing. Metuchen, NJ: Scarecrow Press, 1981. p.237

参考文献

- 1) 中村弘光「アフリカ現代史Ⅳ」(世界現代史;16) 山川出版社, 1982年 254 p.
- 2) 宮部頼子「ユネスコの対途上国図書館開発事業に関する一考察: 初期20年間の対 アジア・アフリカプロ

- グラムを中心に」図書館学会年報 34 巻 2 号, 1988 年 6 月 p.49-59
- 3) Agidee, Dickson “Legal provisions for library development in Nigeria: 1948-1968.” In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.358-372
 - 4) Alemna, A. A. “The development of school libraries in Ghana.” In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.304-311
 - 5) Alemna, A. A. “Libraries and the economic development of Ghana.” *Aslib Proceedings*, v.41, no.3, March 1989. p.119-125
 - 6) Alemna, A. A. “Management of libraries in Ghana: concepts, practices and constraints.” *Aslib Proceedings*, v.41, no.6, June 1989. p.217-223
 - 7) Alemna, A. A. “National library and information policies for Africa.” *Third World Libraries*, v.6, no. 1, Fall 1995. p.31-36
 - 8) Alemna, A. A. “Persistent issues in library and information science education in Africa.” *Education for Information*. v.12, 1994. p.429-436
 - 9) Alemna, A. A. “The role of external aid in Ghana’s library development.” *Library Review*, v.41, no. 5, 1992. p.32-41
 - 10) Alemna, A. A. “Special libraries in Ghana: an appraisal.” *Aslib Proceedings*, v.41, no.1, Jan. 1989. p. 23-28
 - 11) Amedekey, E. Y. “Libraries in Ghana.” In: *Encyclopedia of library and information science*. v.10, New York: Marcel Dekker, 1973. p.1-49
 - 12) Banjo, A. Olugboyega “Library and information services in a changing world: an African point of view.” *International Library Review*, v.23, 1991. p.103-110
 - 13) Balarabe, Ahmed Abdu “Nigerian university libraries and the World Bank loan.” *Third World Libraries*, v.5, n.2, Spring 1995. p.31-45
 - 14) Bengé, Ronald “Library provision in Africa 20 years on: a review article.” *Journal of Librarianship and Information Science*, v.28, no.3, Sept. 1996. p.171-175
 - 15) Chidi Anyim, J. “Public libraries as cultural centers.” In: *Classical readings in African library development*. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.31-37
 - 16) Chijoke, Mary Ellen “A national cataloguing service for Nigeria: a preliminary proposal.” *Information Development*, v.5, no.3, July 1989. p.148-153
 - 17) Chijoke, Mary Ellen “Public library as information networks: Nigeria in the twenty-first century.” *Journal of Librarianship*, v.21, no.3, July 1989. p.174-185
 - 18) Collet, Joan “American libraries abroad: United States Information Agency activities.” *Library Trends*, Jan. 1972. p.538-547
 - 19) Donovan, David G. “Library development and the U.S. consultant overseas.” *Library Trends*, Jan. 1972. p.506-526
 - 20) Fosu, V. K. “Technical assistance libraries in Ghana: the case of the ODA/BPP at the University of Ghana Library.” *Library Review*, v.49, no.3, 2000. p.125-128
 - 21) Ifidon, Sam E. “The effects of government funding on university libraries in Nigeria.” In: *Information and libraries in the developing world 1: Sub-Saharan Africa*. compiled and edited by Michael Wise and Anthony Olden. London: The Library Association, 1990. p.90-105
 - 22) Ifidon, Sam E. “Establishment of new university libraries in English-speaking West African countries: problems and prospects.” In: *Classical readings in African library development*. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.275-293
 - 23) Ifidon, Sam E. “The effects of government funding on university libraries in Nigeria.” In: *Information*

- and libraries in the developing world 1: Sub-Saharan Africa. compiled and edited by Michael Wise and Anthony Olden. London: The Library Association, 1990. p.90-106
- 24) Jegede, O. "Problems of acquisitions of library materials in a developing country: University of Lagos experience." In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.407-422
 - 25) Jusu-Sheriff, Gladys "Libraries in Sierra Leone." In: Encyclopedia of library and information science. v.27. New York: Marcel Dekker, 1979. p.336-402
 - 26) Kotei, S. I. A. "Some variables of comparison between developed and developing library systems." In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.12-30
 - 27) Matogo, B. W. K. "Public library trends in East Africa, 1945-1965." In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.224-240
 - 28) Mchombu, Kingo "Which way African librarianship." International Library Review. v.23, 1991. p.183-200
 - 29) Montagnes, Ian "Sustainable development in book publishing." Scholarly Publishing, v.23, n.4, Jul. 1992. p.231-241
 - 30) Mwiyeriwa, Steve "Anglophone Africa." In: Encyclopedia of library history. New York, Garland Publishing, 1994. p.33-37
 - 31) Newa, John M. "Libraries in national literacy education programmes in Africa South of the Sahara: the state-of-the-art." International Library Review, v.22, 1990. p.73-94
 - 32) Nwoye, Sam "Libraries in Nigeria." In: Encyclopedia of library and information science. v.20, New York: Marcel Dekker, 1977. p.1-49
 - 33) O'Connor, Brigid and Roman, Stephan "Building bridges with books: the British Council's sixty year record." Logos, v.5, issue 3, 1994. p.133-140
 - 34) Ogundipe, O. O. "The colonial contribution to librarianship in developing countries: some negative aspects." Focus, v.29, no.3, 1998. p.153-157
 - 35) Omolewa, Michael "Adult readers in Nigerian libraries, 1932-1960: a study of library use in colonial Nigeria." In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.241-255
 - 36) Onadiran, G. T. and Onadiran, R. W. "Public library services in Nigeria." In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.198-221
 - 37) Oyeoku, Kalu "The library and the Third World publisher: an inquiry into a lopsided development." Library Trends, v.26, 1978. p.505-514
 - 38) Ozowa, V. N. "Automated issue systems in Nigerian university libraries: joining the Joneses." In: Information and libraries in the developing world 1: Sub-Saharan Africa. compiled and edited by Michael Wise and Anthony Olden. London: The Library Association, 1990. p.83-89
 - 39) Parker, J. Stephen "Libraries in developing countries: the British connection." British Book News, Feb. 1989. p.90-91
 - 40) Richards, Tony "From giving to helping: the evolution of a development agency." Logos, v.4, issue. 1, 1993. p.26-32
 - 41) Rosenberg, Diana "Can libraries in Africa ever be sustainable?" Information Development, v.10, no.4, December 1994. p.247-251
 - 42) Sharr, F. A. "The library needs of northern Nigeria: a report prepared under the special Commonwealth African assistance plan, Ministry of Information, Kaduna, 1963." In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.7-11

- 43) Sitzman, Glenn L. African libraries. Metuchen, NJ: Scarecrow Press, 1988, 486p.
- 44) Smith, Keith “Books and development in Africa: access and role.” Library Trends, v.26, 1978. p.469-487
- 45) Swaby, Joan E. “Regional cooperation: the role of COMLA in international librarianship.” IFLA Journal, v.15, n.3, 1989. p.243-245
- 46) Tamuno, O. G. “Printing and publishing in Nigeria: a historical survey.” In: Classical readings in African library development. Lanham, MD: Scarecrow Press, c2003. p.385-399
- 47) Zell, Hans “Africa: the neglected continent.” Logos, no.1/2, 1990. p.19-27